

# セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.51

発行 2015. 3. 31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

館長 鈴田 由紀夫

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸約乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

<http://saga-museum.jp/ceramic/>

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp



ゆうり こうれいじゅうもんおおばち  
釉裏紅靈獣文大鉢

有田 初代松本佩山作

昭和14年（1939年）制作  
九州陶磁文化館蔵 二代松本佩山氏贈

口径：63.6cm

高さ：8.5cm

高台径：37.3cm

口径60cmを超える大型作品。この作品は初代松本佩山の作品の中でも最高傑作とされる。安定して発色させることが難しい釉裏紅独特の赤が美しい。

霊獣というタイトルには、この象（白象）が神聖な存在であるという意味がこめられている。高貴な人物が騎乗することを示す天蓋や絨毯などの懸装品が表現されており、これら懸装品の精緻な装飾文様をあらわした釉裏紅の彩色にはむらがない。制作年も明らかで、松本佩山の釉裏紅技術における一つの到達点をしめす作品である。

～平成27年度特別企画展のお知らせ～

# 「有田焼創業400年事業 明治有田 超絶の美 —万国博覧会の時代—」 展

## ○趣 旨

江戸時代初期、日本で最初に磁器づくりに成功した有田では、国内にとどまらず、ヨーロッパ各国の王侯貴族を魅了する華やかで精緻な製品を数多く製作してきました。

江戸幕府の終焉とともに明治時代が始まると、有田焼は政府により殖産興業製品として位置づけられ、西洋のデザインを意識した、色絵や金彩をふんだんに用いた品々が作られて、世界各国で開催された博覧会を中心に絶大な人気を誇ります。

本展では、明治時代に作られた有田焼の逸品をはじめ、初公開となるそれらの図案など、約300点を展覧し、明治時代の有田焼の魅力に迫ります。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 共 催 西日本新聞社
- 協 力 有田ポーセリンパーク 株式会社香蘭社
- 特別協力 世界文化社
- 会 場 佐賀県立九州陶磁文化館  
第1・第2・第3展示室
- 会 期 平成27年10月16日(金)～12月6日(日)  
47日間
- 休 館 日 月曜日(ただし11月2日及び11月23日の祝日は開館)
- 出品点数 約100件 300点
- 観 覧 料 有料(予定)



色絵牡丹文菊耳付壺  
深川栄左衛門及び年木庵喜三製  
1868(明治元)年～1870年代 香蘭社蔵



色絵龍鳳麒麟文耳付花瓶 年木庵喜三製  
1868(明治元)年～1870年代 香蘭社蔵



色絵花兔唐草文蓋付鉢(チュリーン)・受皿  
深川製磁社製  
1900(明治33)年から1920年代  
佐賀県立九州陶磁文化館蔵 高取紀子氏贈

## 新収蔵品展 1

- 会 期 平成27年5月16日(土)～6月21日(日)
- 内 容 平成26年度に寄贈を受けて、新たに館蔵となった古陶磁や現代作品を展示します。
- 展示数 180件 210点(予定)
- 会 場 第2展示室



灰釉手付水注  
肥前 1580～1610年代  
佐賀県立九州陶磁文化館蔵 爲近美榮氏贈



染付松鶴文火鉢  
肥前・有田窯 1820～1860年代  
佐賀県立九州陶磁文化館蔵 爲近美榮氏贈



染付山水文輪花大皿 肥前・有田窯  
1640～1650年代 重要文化財  
佐賀県立九州陶磁文化館蔵 今泉吉郎氏贈



染付山水文水指 肥前・有田窯  
1610～1630年代 佐賀県重要文化財  
佐賀県立九州陶磁文化館蔵

## 新収蔵品展2 <sup>せきまさたけ</sup>関正献コレクション展

- 会 期 平成28年3月16日(水)～4月3日(日)
- 内 容 関正献氏が1950年代に収集した全国各地の現代陶芸家による茶碗のコレクション。のちに重要無形文化財保持者(人間国宝)となった陶芸家による茶碗を含みます。
- 展示数 40件 40点
- 会 場 第1展示室



三島手 檜垣平茶碗 昭和26年頃(1951年)  
中里無庵(十二代中里太郎右衛門)作  
佐賀県立九州陶磁文化館蔵 関正康氏贈

## 新春展 有田焼創業400年記念 館蔵初期伊万里名品選(仮称)

- 会 期 平成27年12月26日(土)  
～平成28年1月11日(月・祝)
- 内 容 有田焼創業400年となる新しい年を記念して、当館が所蔵する初期伊万里の中から選んだ作品を展示します。
- 展示数 40件 50点(予定)

## ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて11

シシリーのパレルモに残る肥前色絵  
蓋付壺 その2Hizen Polychrome Lidded Jars in Palermo,  
Sicily No.2

前号で、シシリーの首府パレルモの王宮と貴族の館に残る多数の18世紀初頭の肥前色絵蓋付壺を紹介し、オランダ東インド会社が西欧の宮殿の装飾用にと長崎から運んだ肥前磁器がここに到達するまでの経路については、更なる調査が必要と述べた。その後イタリアの二人の研究者との交流によって、王宮に残る蓋付壺の流入経路と時期についての教示を受けたことを報告する。また、今回論考で対象とする資料は、前号で紹介したミルト宮殿 (Palazzo Mirto) にある一対の、高さ89cmの色絵花卉文蓋付壺 (図1) と、これに類似し、先にセラミック九州No.40 (2004.3.31) p.5で紹介したジェノヴァ (Genova)にある蓋付壺と筒型瓶(図2,3)、その紹介の際に言及した大英博物館 (The British Museum以下BMと略す) 所蔵の蓋付壺と筒型瓶 (図4)そして、英国南西部にある貴族の館、ポート・エリオット (Port Eliot) 所蔵の蓋付壺 (図5) と筒型瓶である。これらは、その意匠の特徴から二つのグループに分けられ、大きさも大小ある。パレルモのミルト宮殿と、英国のプリマス港(Plymouth)から入り江続きのポート・エリオットは、ヨーロッパのほぼ東と西の端に位置しているが、どちらも海に近接する。ヨーロッパのこの二つの地点の肥前磁器が、まさに同意匠であることを紹介したい。

## 1. パレルモの王宮に残る肥前磁器コレクションについてのイタリアの研究者からの報告

ローマのルイス (LUISS) 大学でシシリーへのイスラムの影響を研究するフランチェスカ M.コラオ教授(Prof. Francesca M. Corrao) が、2014年4月に来日することを知った。教授の紹介でパレルモのマリア・レジネッラ女史(Ms. Maria Reginella)とメールの交換をした結果、パレルモの王宮にある蓋付壺は、ナポリ (Napoli) が1799年1月にナポレオン (Napoleon) の攻撃を受けた際に、ナポリ王のフェルディナンド4世 (Ferdinand IV) (1751-1825) と、その妻のマリア・カロライナ (Maria Carolina) (1752-1814) がパレルモに逃れる際に、ナポリから携行した家財の一部であり、その年の6月に再びナポリに戻る際にはこれらの蓋付壺はパレルモに残されたとの情報提供を受けた。

これらの肥前磁器がブルボン (Bourbon)家出身のフェルディナンド4世のものか、オーストリア (Austria) のハプスブルク (Hapsburg) 家出身のマリア・カロライナのものか、更なる調査が必要であるが、わざわざナポリからパレルモまで持って逃げたということは、相当愛着のある品々であったといえるのではないか。また、この時期に同じく大量に日本からヨーロッパに輸出された大皿が、ここには全く見当たらないということも、所有者

TANAKA, Shigeko

田中 恵子 ●日本アジア協会副会長  
●東洋陶磁学会 (日本) 会員  
●The Oriental Ceramic Society (London) 会員

の好み、あるいは当時の価値観を表しているようにも思えるが、これについては更に調査が必要である。また、シシリーの貴族達はヨーロッパ諸国への旅の際、もしくはパレルモで英国、フランスからの輸入の品物を扱う店で、東洋陶磁を買い入れたとのことである。イタリア本土の貴族との交流、縁組も多く、パレルモの館に残る肥前磁器の流入経路は、それぞれの館の蔵品目録や、代々の家族構成を見ながら考えることが必要と思われる。

2. パレルモのミルト宮殿所蔵の高さ89cmの一対の色絵  
蒔絵花卉文蓋付壺 (図1) と他の地域にある同種のものとの比較

1) ジェノヴァの元貴族の館にある色絵蒔絵花卉文蓋付壺 (図2) 3個と筒型瓶2本の詳細については、たまたま来日したジェノヴァのキヨソーネ美術館 (Museo Chiassone) のドナテッラ・ファイラ女史(Ms. Donatella Failla)に依頼し、次のような報告を得た。

この元貴族の館のパラッツォ・スピノラ (Palazzo Spinola) は現在国立美術館となっている。色絵蒔絵花卉文蓋付壺3個 (Inv.Nos.291-293) は、蓋を含めて高さ90cm、壺本体の高さ60cm、壺の口径22cm、底径20cm。

筒型瓶2本 (Inv. 236-237) は高さ60cm、口径27cm、底径14.5cm。この館も港に近い場所に建っている。

## 2) BM所蔵の色絵蒔絵花卉文蓋付壺2個と同意匠の筒型瓶2本 (図4)

BM日本部門勤務の土屋範子氏に依頼して、送られてきた蓋付壺2個と筒型瓶2本の写真と詳細を紹介したい。所蔵番号が蓋付壺はF488、筒型瓶はF489であり、この番号からキュレーターのフランクス (Sir Augustus Wollaston Franks KCB (1826-1897) が1896年に引退する前に大英博に入っていることがわかる。蓋付壺で蓋上に黒髪の婦人立像があるものは、蓋を含め



図1 色絵花卉文蓋付大壺  
1700 ~ 30年代  
ミルト宮殿



図2 色絵花卉文蓋付大壺  
1700 ~ 30年代  
パラッツォ・スピノラ

ての高さ67cm、壺の径32cm、重さ7.2kg、髪の色が褪せている婦人立像が蓋上にあるものは、蓋を含めて高さ67.5cm、壺の径32cm、重さ6.9kgであり、筒型瓶は高さ42cm、口径17cm、底径15.5cmとのことである。本来は蓋付壺がもう1個ある典型的な5個組をなしていたものであろう。

### 3) ポート・エリオット(Port Eliot)に残る蓋付壺(図5)と筒型瓶

この館にはパレルモのミルト宮殿にある一対の色絵蒔絵花弁文蓋付壺(図1)と全く同じ意匠の蓋付壺(図4)が3個、筒型瓶が少なくとも1本残されている。ポート・エリオットはロンドンから南西へ235マイル、コーンウォール(Cornwall) 県の南側の港、プリマス(Plymouth) から西に深く入り込んだ入江の北側のセント・ジャーマンズ(St Germans)にある館で、その6,000エーカー(735万坪)の敷地のなかには430年にその基礎が築かれ、その地域の大聖堂にまで発展した教会が残っており、ヘンリー八世(Henry VIII)の修道院解体命令により、付属する12世紀からの建物は1540年代にエリオット家のものになり、聖堂は英国国教会の管理下に置かれて現在に至っている。部屋数100、82本の煙突、13の階段、15の裏口、台所が一番近い食堂まで100メートルの距離、屋根の広さは半エーカーというこの建物の最も古い部分は3世紀から5世紀とまでもいわれている。この家の当主は1964年に21才でこの館を祖父から受け継ぎ、父の死によって1988年に第10代セント・ジャーマンズ伯爵となったペリグリン(Peregrine)・エリオットであるが、伯爵は、この家ではなにも捨てずにとつてある、といいながら邸内を案内してくれた。ここにはパレルモのミルト宮殿にある一対の色絵蒔絵花弁文蓋付壺(図1)と全く同じ意匠の蓋付壺(図4)が3個、筒型瓶が少なくとも一本が残されており、3個の壺の内、一個は他の2個よりも丈が低いこともわかった。

4) 1994年9月にロンドンのデイヴィス・ミューズ街(Davies Mews)の店で見かけた蓋付壺(図6)については、残念ながらサイズを聞き逃したが、2014年9月26日、同じくロンドンのLAPADA Antique Fairで見かけた蓋の上に獅子が乗る一対の壺(図7)は、口までの高さが62cmで、ちなみに£6500とのことであった。これらはBM、及びジェノヴァのパラッツォ・スピノラ所蔵の蓋付壺と同じ意匠である。



図3 色絵花弁文筒型大瓶  
1700～30年代  
パラッツォ・スピノラ



図4 色絵花弁文蓋付大壺・筒型大瓶  
1700～30年代 大英博物館

### 3. まとめ

これらの写真を見ていただくとわかるように、壺の窓の中と蓋の染付の花弁文、壺の口縁部と下部の白抜き染付の唐草は、どの壺も恐らく同じ工人によって描かれたのではないかと思われ、その上に赤金の花を色絵で加え、器面の赤黒い釉の上に格子状の金彩を施していることも、窓と窓の間に漆絵でハウチワカエデの葉の形のような文様を2枚重ね、窓の右と左でその2枚の重ね方を逆にする意匠も共通しているが、その葉の色使いは大きく違って二通りあり、ミルト宮殿の壺とポート・エリオットにある壺と筒型瓶では、この二枚重ねの葉の文様が赤金だけの濃淡であるのに対し、BMのものやそのほかのものは皆、濃い瑠璃色で葉を塗った上に青みがかった明るい緑の葉と赤花を描いたものと、赤金の濃淡で装飾された葉との組み合わせであること、また、壺の肩部の蓮弁様の文様が、前者のグループのものは、より幅広で二通りの色違いの弁が交互に並ぶのに対し、後者のグループのものは、薄い赤金の幅の狭い蓮弁がびっしり並べられており、この二点が大きな相違である。蓋の上に乗る婦人立像は型も彩色にも違いがないように見えるが、獅子はオリジナルかどうか確かめられていない。

本稿を書くに当たり、以下の方々にご教示いただいた。ここに名前を記して感謝の意を表したい。

Prof. Francesca M. Corrao, Ms. Maria Reginella, Ms. Donatella Failla, 土屋範子氏, Dr. Nicole Coolidge Rousmaniere, 大橋康二氏



図5 色絵花弁文蓋付大壺  
1700～30年代  
ポート・エリオット



図6 色絵花弁文蓋付大壺  
1700～30年代  
ロンドン デイヴィス・ミューズ街某店



図7 色絵花弁文蓋付大壺  
1700～30年代  
ロンドン LAPADA Antique Fairにおける某店

## ～平成26年度特別企画展の報告～

## 特別企画展 「白き黄金—有田・伊万里・武雄・嬉野の磁器の美と技—」

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館／佐賀県有田焼  
創業400年事業実行委員会
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館  
第1・第2・第3展示室
- 会期 平成26年10月4日（土）～11月24日  
（月・振休）47日間  
月曜休館（祝日の10月13日・11月3日と  
振替休日の11月24日は開館）

## ○展示内容

我が国で最初に磁器が焼かれたのは、佐賀県の有田でした。泉山陶石という磁器の原料に恵まれた有田は、染付をはじめ柿右衛門様式や金襴手様式などの華麗な色絵を生み出し、国内外で高く評価され、影響力のある産地として発展してきました。有田を中心とした磁器生産が発展するとともに、佐賀県内には、現在の伊万里市、武雄市、嬉野市などの各地区で特色ある磁器生産が行われました。肥前の磁器産地として技術交流がある一方、これら各地区では、各時代の知恵や創意工夫によって特徴ある製品を生み出し、我が国のなかでも中心的な磁器産地として現在に至ります。

白く硬い磁器という素材は、そのつややかさと堅牢さで我が国のみならず、海を越えて海外の人々を魅了し、「黄金」にたとえられるなど、貴重なものとみなされてきました。

この展覧会では、有田焼創業400年を前に、佐賀県内各地で生み出された磁器126件203点を産地の製品にある美しさと技をみどころとして、特徴とともに紹介しました。



展示風景

- 観覧料 無料
- 展示解説 10月4日（土）より毎週土曜日  
14：00～15：00
- 関連行事
- ◎記念茶会 10月4日（土）11：30～  
茶道裏千家 南宗紅社中による立礼席
- ◎ミュージアムコンサート  
・アルモニア・カルテット ミュージアムコンサート  
アルモニア管弦楽団所属のアーティストによる名曲演奏（会場：第4展示室）10月25日（土）11：00～11：45 15：00～15：45  
・江副友美 ミュージアムコンサート  
ソプラノ歌手、江副友美氏による古典派・バロック音楽のコンサート（会場：第4展示室）11月3日（月・祝）11：00～11：30 13：30～14：00
- ◎チームラボ制作のデジタルアート展  
「未来の有田焼があるカフェ」（会場：第1展示室）  
10月4日（土）～11月24日（月・振休）
- ◎Saga Media Arts Project 2014 Media Butterfly in Arita（11月1日（土）～11月23日（日））の一会場として、チームラボ制作の「世界は、解き放たれ、そして、連なっていく-有田焼」（会場：講堂）、公益財団法人サントリー芸術財団によるワークショップ「有田焼をデザインする。」（会場：研修室）が開催されました。
- ◎物産販売コーナーの設置（会場エントランスホール）有田・伊万里・武雄・嬉野の4市町の特産品を展示・販売しました。
- ◎焼物絵付け体験等（会場 エントランスホール）有田・伊万里・武雄・嬉野の各産地の組合・窯元等の協力を得て、下記の日程で絵付け体験やイベントを開催しました。
- ・伊万里の日 10月12日（日）  
ゆるキャラ「いまりんモーモちゃん」来館
  - ・有田の日 10月19日（日）  
「有田皿山まつり」でお馴染みの“皿踊り”披露
  - ・武雄の日 10月26日（日）  
武雄温泉名物の“指湯”体験
  - ・嬉野の日 11月16日（日）  
嬉野温泉の“足湯”体験



記念茶会



有田の日のイベント 磁器太鼓の演奏



チームラボ制作のデジタルアート作品

## 第111回九州山口陶磁展

○会 期 平成26年4月29日(火・祝)～5月9日(金)  
12日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し、伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として開催され、今回第111回目を迎えました。

今回の展覧会では、第1位の辻浩喜氏の「Shell」をはじめ、139点の作品の中から93点の入賞・入選作品が展示されました。



第1位 文部科学大臣賞 辻浩喜作「Shell」

## 新収蔵品展

○会 期 平成26年5月16日(金)～6月22日(日)  
33日間

平成25年度に購入あるいは寄贈され、新たに館蔵となった古陶磁や、12代酒井田柿右衛門といった現代作家の作品など34件63点を展示しました。今回は、「色絵虎置物」や「色絵婦人像」など、貴重な資料が収蔵されたことをお知らせする充実した内容となりました。



色絵虎置物 肥前・有田窯 長瀬テツ子氏贈

## 新春展 吉祥の器展

○会 期 平成26年12月20日(土)  
～平成27年1月12日(月・祝) 19日間

お正月にふわさしい新春展「吉祥の器」を開催しました。昔も今も変わらぬ人々の様々な願い(長寿・富貴・子孫繁栄・栄達・招福)を込めて作られた、華やかな吉祥の器「色絵吉祥文輪花大皿」、「釉彩盛上羊文大皿」など、40件69点を展示しました。



展示状況

## シリーズ やきものの技法(46)

## 練り込み(練り上げ)

異なった二色以上の素地を練り合わせたり、交互の層に重ね合わせ、その断面に現れた文様を器の表面に表す技法。素地の色数や合わせ方、練り方などで縞模様、墨流し風の文様、木理文、木目、鶉手などの複雑な文様ができ、絵付けによる装飾とは異なる、より偶然に近い表現の面白さがある。しかし一方、異なる土を組み合わせることから、土の収縮率が異なるなどの理由で、乾燥や焼成の過程で割れることが多いという製作上の難しさがある。

この技法は、古く中国唐時代に始まり、宋時代にも磁洲窯系の窯で作られており、絞胎などと呼ばれている。また、朝鮮半島では12世紀頃の高麗青磁にこの技法のものがある。

日本では、桃山時代、美濃(岐阜県)の志野焼に白土と赤土を合わせて文様を出す技法があり、練り上げ志野、練り込み志野などと呼ばれている。また、江戸前期にも同じ美濃に練り込みの陶器がある。さらに19世紀には尾張(愛知県)の常滑焼で練り込みの一種の木目焼の技法が行われ、近代には三重県の萬古焼の中でも練り込みの製品が知られているが、いずれも数が少ない。

九州陶磁では、肥前(佐賀県嬉野市)の内野山窯から17世紀と考えられる練り込みの陶片が出土しており、江戸初期に肥前などでもこの種の製品が作られた可能性があるが、類例に乏しい。しかし、豊前(福岡県)の上野焼では、江戸後期にこの練り込みの食器や瓶類が知られており、一定の生産が行われていたことは注目される。

(家田淳一)



緑釉練込瓢形瓶  
豊前・上野窯 19世紀中葉～明治  
佐賀県立九州陶磁文化館蔵 高取紀子氏贈

## シリーズ やきものにみる文様(46)

## 印判手仙境図

印判手仙境図の文様は、中国の福建省南部に位置する漳州窯の色絵の大皿に特徴的な文様である。皿のデザインとしてのみ見られ、これを写したものは写真のような、肥前の吉田窯に事例がある。このほか、播磨の三田窯、尾張の犬山窯にもこのデザインに由来する製品がみられ、日本でも広く好まれたことがわかる。漳州窯の製品は日本や東南アジアに輸出されており、中国磁器の輸出が清初の内乱時に停滞した際には、肥前の吉田窯の製品がその代替商品として輸出されたと思われ、インドネシアやフィリピンなどでの出土例が報告されている。

見込には仙境をあらわした風景文様、周辺には四方に赤く印鑑のような四角い文様が配置されており、この文様の組み合わせから、印判手仙境図と呼ばれている。仙境とは、中国の神仙思想からくるもので、不老不死の仙人が海や山の異界に存在していると考え、神仙が住む楽園を意味している。赤い印判の文字は判読できない。印判の間には緑色で火炎状の囲みの窓絵を描き、中には風景や船、鳥などが描かれる。見込の中央に屋根を連ねた塔が描かれ、その塔は左右二つに分かたれており、間に白い道のような部分が表される。この中央の塔から、このデザインは欧米でsplit pagoda「裂けた塔」と呼ばれている。塔は、下の世界から上の世界に通じる通り道の間に位置し、仙境に通じる建物を意味していると解釈されている。塔の右側には、参拝者であろう人物が描かれ、左側には船が描かれており、この塔は川もしくは海のほとりに建てられていることが想像される。

塔の下の世界は、波間に浮かぶ三軒の塔もしくは門で、塔の上方の世界には、山が連なっている。漳州窯の色絵ではその天辺に太陽が表されているが、肥前吉田窯の製品では太陽は略されている。

(藤原友子)



色絵印判手仙境図大皿  
肥前・嬉野・吉田窯 1650～1660年代  
佐賀県立九州陶磁文化館蔵